

隊友 船橋だより

平成26年9月号

発行：千葉県隊友会 船橋支部事務局

平成26年8月21日富士総合火力演習見学に36名参加、秋の日差しを感じる天候に恵まれ、10式戦車や重火器、航空機からの射撃の音と風圧に圧倒され他国に劣らない自衛隊の装備に感心し、日本の安全はこれらを扱う自衛官によって守られていることを実感した。また、参加者の高校生5名は今まで以上に自衛隊志願が強くなったと感想を打ち明けてくれた。



富士総合火力演習見学参加者空の神兵像前で

標的に向かって発射された対戦車誘導弾

「平成26年度隊友会船橋支部定期総会」8月30日習志野駐屯地隊員クラブ（華の舞）で、千葉県隊友会会長富田稔氏のご臨席を賜り参加者34名で開催、活発な意見が交わされ議案はすべて、原案通り可決されました。場所を同じくして「26年度春の叙勲祝賀兼て懇親会」を、来賓の前内閣総理大臣野田佳彦氏はじめ千葉県議会議員斉藤守氏、船橋市議会議員中村実氏のご臨席を賜り、楽しく和やかに酒を酌み交わし一時を過ごし再会を約束し、別れを惜しみつつ午後2時に解散した。



26年定期総会

春の叙勲祝賀兼て懇親会
叙勲授受の鎌田秀夫氏
(前列左から3番目)

千葉県隊友会会長富田稔氏 (右)
船橋支部長森良雄氏 (左)

団長のメッセージ
(叙勲授受お祝い)

26年度特別会員は次の7名、順不同です。野田佳彦氏（国会議員衆議院議員民主党）、
斉藤守氏（県議会議員自由民主党）、川畑賢一氏（市議会議員自由民主党）、
杉川浩氏（市議会議員自由民主党）、中村実氏（市議会議員自由民主党）、
佐藤新三郎氏（市議会議員自由民主党）、中村静雄氏（市議会議員市政会）、（写真原稿岡本）

富士総合火力演習見学の感想

佐野 栞 (中学1年生)

私は、富士総合火力演習見学に行ってもものすごくいい体験をしました。自衛隊の皆さんのミサイルなどの命中率の高さなどに驚きました。それと、自衛隊の皆さんの使う用語10 (いちまる) などの用語を聞けてものすごく勉強になりました。学校みんなに話したいと思います。

佐野智美 (栞さんの保護者)

富士総合火力演習見学の参加、大変貴重な体験が出来ましたこと感謝いたします。日本の自衛隊の組織、装備、職種、活動訓練など、私の想像をはるかに超えた大規模な活動、私たちが安心して暮らせるのは自衛隊の皆様のおかげだとつくづく感じました。平和というのは本当に幸せなことですが、このような安全の確保をしていただいていることを忘れずにいたいと思います。このたびの参加、本当に有難うございました。

藤巻 晴 (小学2年生)

絵日記に書いたので移します。

8月21日(木) 「ふじのかりよくえんしゅう」

朝3時半におきて、じえいたい(自衛隊)のバスにのってしずおかにいった。10時から、えんしゅう(演習)がはじまった。せん車(戦車)やへりこぷたー(ヘリコプター)がいっぱいとんできた。ねらった所(目標)にぼくだん(弾)やじゅうだん(榴弾)があたった。大きな音でびっくりした。

晴君の保護者

念願の火力演習、大きな音と数々の戦車にヘリコプター。TVでみる時とは違う大迫力にとっても驚きました。大砲が発射された時の空気の振動には圧巻でした。2年生の息子も心に残る夏休みの思い出の一つになったことでしょう。今回、参加させてもらってとてもよかったです。ありがとうございました。

佐保 憲昭 (小学6年生)

国を守る力

ぼくは夏休みに富士総合火力演習を見にいきました。日本は太平洋戦争で敗れた後は一度も戦争をしていません。けれども他の国から攻撃されたときに日本はどのような対応をするにかとずっと疑問に思っていました。ぼくが自衛隊のことを知ったのは東日本大震災のときでした。このときからぼくは自衛隊に興味を持ちました。そして今年に富士総合火力演習を見に行くことができました。まず最初に155ミリりゅう弾砲などによる遠距離火力の演習でした。これを見たときぼくは何も言えませんでした。3kmぐらいはなれた所の標的を正確に撃ったからです。この後もすごいえんぎ(弾)がつづきました。そして一ばん見たかったものを見ることができましたそれは戦車です。戦車は一度砲撃するとすごい爆発音を鳴らしました。そして陸上自衛隊の装備の紹介がおわり、日本の島に敵がせめてきた設定で訓練を行いました。訓練を見ていたら自衛隊のきびきびとした行動にとっても感動しこれが日本をまもる力なのだと思いました。でも敵が来るこないではなくつねに気をぬいてはいけないということがわかりました。

憲昭君の保護者

隊友会の皆様、ありがとうございました。日本の国防力の高さを感じることができました。火器だけでなく、それを運用する自衛隊の方々の日々の鍛練に圧倒されました。

青木俊和 隊友会会員 小室空手スポーツ少年団

このたび、富士火力演習の参観には私の関係の子供たち(スポーツ少年団)の希望者とその父兄を参加させてもらいましたが、その感想を文で返事するよう伝えていましたところ、やっと揃いましたので、参考までに送ります。子供は子供なりに、いろいろ感じてくれているようで、

連れて行ったかいがあったかなと思っています。中には関心があって、抽選に何回も応募したが当たらなかつたと喜んでいました。私もいろいろのグループに関わっていますので、折を見て、一般の方々に隊友会なり自衛隊を少しでもPRし理解を得ることができればと思っています。

堀江 康之

拝啓、早々に「富士火力演習」予行見学の全員の写真を送っていただき有難うございました。天候にも恵まれ楽しい一日を過ごさせていただきました。26年の思い出の一ページになることと思います。話は変わりますが一週間前の8月12日から14日迄孫を連れて箱根に行った折、大涌谷から桃源台迄の森林散策のイベントがありボランティアの案内で下る途中ゴロゴロと雷の様なしているので心配になり聞いてみると自衛隊の富士の演習の音との事それを家内も聞いていたので、今回、笹野様のお口添えもあり出席させていただきました。小生は多少の自衛隊に知識はありますが、家内は全くないのと同じでヘリコプターからジープ、オートバイ等が降りてくるのを見て感激し本当に勉強になったと帰ってきました。余端に孫に電話をしました。家内も本当になつたと思います。いろいろと気を使っただき感謝しております。若い人が多く集まり日本の防衛、災害等を守ってくれることを期待します。本当に有難うございました。敬具

谷島 勇作

前略、この度は富士自衛隊総合火力演習見学できましたこと心から感謝申し上げます。日頃から毎日毎日訓練された隊員皆様の努力と迫力は想像絶するものでした。岡本様の早朝点呼人数の確認も幾度も幾度もなされ念には念の入れよう、あらためて感謝いたします。記念の集合写真有難うございました。バスの運転された方、お疲れ様でした。一度もブレーキのショックもなく安全に運行して頂き心から感謝申し上げます。私も長年バスの運転してまいりましたので久しぶりにバスに乗せて頂きなつかしい一日のバスの旅でした。次回参加できますように心待ちしております。草々

以上、「富士総合火力演習感想の投稿紹介」原文のまま掲載しました。(岡本)

中国という国を学ぼう (7月号の続き)

3. 中国政府はウソをつく

東京電力福島第一原発事故の発生直後、ある東京在住の中国人女性が故国に“避難”した。日本政府の放射能物質が首都東京にまでは拡散していないとの発表を、実は拡散しているのではと真剣に恐れたのだ。長年の中国暮らしの経験から「政府というものは必ずウソをつく」と思い込んでいた。それほど中国政府に対する中国人の不信感は強い。この政府不信の蔓延がいずれ中国共産党政権を破綻させるのではないかと、この見方さえある。多くの党幹部の子弟を海外留学させ、現地の銀行に蓄財していることも、この説を補強する。

また、2010年9月7日の中国漁船が尖閣諸島付近で海上保安庁の巡視船に衝突した事件でも、当初中国政府の機関メディア「新華社」は、海保の船が中国漁船にぶつけたという虚偽の図までウェブサイトに掲載した。また、党機関紙・人民日報が、沖縄県の帰属は「未解決」と主張する論文を掲載し、系列紙も同様の社説を掲げた。真の狙いは尖閣諸島だろう。まず強めの主張を打ち出し、それを取り下げることで相手の譲歩を引き出そうとするのは外交交渉の常套手段である。だが、沖縄に対する中国の領有権をちらつかせるのは、無理筋で荒唐無稽すぎる。国際社会の「中国異質論」に拍車をかけるだけで、むしろ逆効果である。習近平政権は国内世論対策上、領土問題で強硬姿勢を取らざるを得ない事情から「ウソ」を重ねる自縄自縛に陥っているようにも見える。

4. 日本人の中國観

しかし、日本人の多くは昔から、中国という国は漠然とした親近感を抱いていた。また「中国は四千年という偉大な歴史を持った国」と思い込んでいる。

紀元前2100年頃興った、夏(か)、に始まり・殷(いん)・周(しゅう)・秦(しん)前漢(ぜんかん)・後漢(ごかん)・三国(さんごく)・晋(しん)・南北朝(なんぼくちょう)・隋(ずい)・唐(とう)・五代十国(ごだいじゅうこく)・宋(そう)・元(げん)・明(みん)・清(しん)・と続いた王朝、そして中華民国・中華人民共和国へと至る。

我々が認識している中国人すなわち漢族は後漢時代の2世紀で消滅している。その後の「元」はモンゴル族が、「清」の時代は満州族であった。しかも大半の王朝は現在の北京を中心としたごく狭い地域を統治したにすぎなかった。地方では、それぞれの種族による支配が一般的であった。今の中国はあまり古くから存在したものではない。

5. 2010年国交回復40周年は激突の年となった

戦後日本は中京(北京政府すなわち中国)ではなく、台湾の中華民国と日華平和条約を結んだ(当時、台湾は国連の常任理事国で、建前上中国を代表する国であった。台湾の国民政府は平和条約締結時、日本の一切の戦時賠償を放棄した)。

1970年当時の北京政府(中国)が次第に台頭し、1971年7月ニクソン米大統領が突然訪中を発表(1972年2月訪中:ニクソンショック)、当時は中国とソ連との関係悪化で(政治路線の違い、領土紛争等)中ソ戦争までささやかれた。

中国はアメリカとの関係改善が急務であった。また、日本の支援をも求めていた。当時公明党の竹入委員長と中国の周恩来との対談時、国交正常化について周恩来は「日米安保は正常化の支障にならない。また、日本が侵略した尖閣列島の領土問題も妨げにならないと思う」とし、国交正常化に必要な次の復興三原則を強調した。

復興三原則

- (1) 中国政府はこの国を代表する唯一の政府である(中華民国:台湾ではない)
- (2) 台湾は中国の一部である
- (3) 日華平和条約は不当であり放棄すべきである

「日本の侵略に対する賠償請求権は将来の日中友好を考え放棄するつもりである」。この三原則をもとに、田中首相と大平外相が、大前提として、「賠償問題」と「領土問題」にはふれないということで訪中した(国交正常化:昭和47年7月)。

田中・大平が中国とのすべての交渉を終え、日本に帰国する飛行機の中で、大平は「今日はお祭り騒ぎでいいけれど、三・四十年経ったら、中国と付き合うのは大変だよ」と。しかし、今考えると周恩来の表現は非常にしたたかで、「尖閣諸島の領土問題」の存在を語り「日本の侵略」という言葉も入っている。国交正常化の前年(1971年)昭和46年12月に中国の外交部は「尖閣は中国の領土」という声明を出していた。

これに対して、日本の外務省がきちんと抗辯をし、自らの立場を主張していたら、もっと交渉を進めることが可能であったであろう。これを放置したからどんどん中国が言い募ってきた。1979年鄧小平首相が来日した折、「尖閣問題は次の世代、さらに次の世代で解決すればよい」と語ったことに日本は安心してしまった。しかし、当時の中国は華国鋒政権であったから、この時点での鄧小平の発言に実権が伴っていなかったことに、日本人は気が付かなかった。その華国鋒が失脚するや全権を握った鄧小平は態度を一変させ、1992年2月全国人民代表大会で「領海法」を制定し、尖閣諸島を中国の領土にくみ入れた。しかも同年秋、天皇皇后両陛下のご訪中が予定されていたので、尖閣問題に抗議して中国を刺激したくない状況でもあった。(美浜区 戸室氏)11月号に続く